

保育や教育のなかでは「発達障害児」という抽象的な子ども（人）は存在しない。存在するのはさまざまな個性と可能性を持つひとりひとりの子どもである。私はあえてそのことを強調しなければならないと思っている。

最近の状況を見ると、障害名や診断分類ばかりに目を向け、それが分からなければ対応が先に進まないと思いついでいる人々が多いように思う。また、「専門家」あるいは「専門的関わり」の必要性を強調する現在の状況は、保育や教育の原点を見失っている。ひとりひとりに向き合い考えることを放棄している。そう思わないではいけない。今こそ浮き足立たずしっかりふみとどまる時である。

私が気になるのは、特定の障害と特定のアプローチを結びつけることが、「特別な支援」だと考える傾向が強くなっていることだ。自閉症の場合、良いと言われている「視覚的構造的構造化」も、人によっては不向きであることがあり、また必須であると言えないことも多い。「構造化」しないと混乱するはずだという思いこみが、子どもの可能性を狭めていることもある。何をするにもひとつひとつカードやスケジュールボードで示すというのも、行き過ぎるとスケジュールをこなすことが目的のようになってしまったり、コミュニケーションの手段を狭めてしまう。言葉でていねいに伝えることをもっと見直すべきだ。

社会性に課題がある場合、「ソーシャルスキルトレーニング」を行おうとすることがある。しかし、その場の設定に入れない子どもも多く、子ども自身が現実場面で応用できるようになるにはかなり時間がかかる。したがって、日常の中で、さまざまな人が関わり、その行動のパターン、感情の動き、調子の波、人による関わり方の違い、学び方の特性、等々をしっかりと把握すること、それに基づき、スモールステップで具体的場面に即して伝えていくこと、そうした手間を惜しまぬ、常識的で丁寧な関わりこそが必要である。

「生活が人間を陶冶する」とは近代教育学の祖のひとり、ペスタロッチーの言葉である。今こそこの教育の原点を見直す時である。限定された場での訓練が人を育てるのではなく、生活そのものの必要性が人を育てるのである。

日常の中でひとりひとりにじっくりと関わり、多様な場面での理解をもとに、そこから仮説を持って工夫を試みていく。あきらめずに、根気よく。障害の有無にかかわらずそうするのである。保育や教育はそういう「専門的」な営みなのである。

昴☆共生社会研究所 事務局長 山崎 晃史  
(臨床心理士)